対人葛藤場面において対人依存が他者受容感に及ぼす影響

池田亜紗

(国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科)

キーワード: 対人依存, 他者受容, 対人葛藤

Effects of Interpersonal Dependency on Acceptance-of-Others in Interpersonal Conflict Situations

Asa Ikeda

(Graduate School of International Christian University)

Key Words: Interpersonal dependency, Acceptance-of-others, Interpersonal conflicts

目 的

自己受容と他者受容には一貫して正の相関が報告されてきた(上村, 2007)。ところが, 最近の研究では, 両者に必ずしも正の相関があるとは限らず, どちらか一方が極めて高い場合, 社会適応性が弱くなったり過剰適応的になったりし, 良好な対人関係が築けないとの指摘がある(上村, 2007)。

本研究では, 他者受容が難しくなる状況として対人葛藤場面に焦点を当て, 依存欲求の高低が他者受容に及ぼす効果を検討した。依存欲求の高い人は対人葛藤場面において他者受容感が低まると仮定し, 対人葛藤場面における他者へのネガティブ感情と, 葛藤処理方略との関連を見ることにした。

方 法

調査対象者 大学生 147 名。平均年齢は 19.91 歳 ($SD=1.36$)。
質問紙 母親, 親友, 恋人を対象人物とした対人葛藤場면을提示し, 各場面について, 対人感情尺度と葛藤処理方略尺度に回答するよう求めた。その後, 対人依存欲求尺度への回答を求めた。

(1) 対人葛藤場面: 大迫・高橋 (1994) の対人的葛藤事態に修正を加えたものを用いた。調査対象者を二群に分け, 一方には「あなたは時間にルーズだ」と非難される文を, もう一方には「あなたは時間にルーズだ。もう一緒にでかけるのはやめたい」と拒否される文を含む場면을提示した。

(2) 対人感情尺度: 大迫・高橋 (1994) の対人感情項目のうち 23 項目を用いた。拒否文の効果を見るため, 「相手から拒否された」という感情項目を加えた。「全く感じない」から「とても感じる」の 5 件法で回答を求めた。

(3) 葛藤処理方略: 大迫・高橋 (1994) の葛藤処理方略尺度を用いた。また, 対人依存欲求尺度は, 竹澤・小玉 (2004) の対人依存欲求尺度を用いた。

仮説 1. 依存高群は低群に比べて, 葛藤場面で他者へのネガティブ感情得点が高い。2. 拒否文脈において, 依存高群は低群に比べて自我縮小傾向が強い。拒否文の効果は, 依存高群でより大きい。

結 果

分析に必要な回答を満した 129 名 (男性 27 名・女性 102 名) を対象に分析を行った。

対人感情と葛藤処理方略 因子分析の結果, 対人感情は, 不安, 怒り, 恥ずかしさ, いやらしさの計 4 因子, 後者は, 自我拡大, 自我縮小, 無視, 方向模索の計 4 因子にまとまった。因子名は大迫・高橋 (1994) を参考にした。

依存欲求 依存欲求尺度の α 係数は .895 であり, 加算得点として扱った。男女ごとの中間値により全体を高群, 低群に分けた。

感情, 行動の下位尺度ごとに合計得点を算出したものを従属変数とし, それぞれについて 2 (依存) $\times$ 2 (文脈) $\times$ 3 (対象人物) の三要因分散分析を行った。不安 ($F(1, 123)=4.875$, $p<.05$), 被拒否感 ($F(1, 124)=5.556$, $p<.05$), 自我拡大 ($F(1, 122)=4.637$, $p<.05$), 自我縮小 ($F(1, 124)=7.258$, $p<.01$) に

おいて依存の主効果が有意であった。また, 怒り感情で依存と対象人物の ($F(2, 246)=74.487$, $p<.01$), 自我縮小行動で依存と文脈の ($F(1, 124)=6.534$), $p<.02$) 有意な交互作用があった。親友場面で, 依存高群は低群よりも怒り得点が高いことが示された。また, 拒否文脈では, 拒否なしと比べて, 依存高群は自我縮小得点が高く, 低群は逆に低くなった。

なお, 全因子において対象人物の主効果が有意であった。不安苦悩や被拒否感, 自我縮小行動は親友と恋人場面で高くなり, 怒りや自我拡大は母親で最も高く, 次いで恋人で高い結果となった。

考 察

依存高群は, 対人葛藤場面において, 低群よりも不安と被拒否感を強く感じ, 自我縮小行動をとる傾向が強いという結果が得られ, 仮説は一部支持された。意外なのは, 依存高群は自我拡大においても得点が高かったことである。怒り感情では親友を除き, 依存低群との有意差がなかったことをふまえると, 依存低群がより怒りを抑えている, または高群は強い不安から自我拡大行動に出ることが考えられる。大迫・高橋 (1994) は甘えが高い人の自我拡大行動について, 依存と支配の二面性が反映されていると論じており, 依存が他者操作欲求と関連している (寺島・小玉, 2007) ことを踏まえれば, 依存にも同様の二面性があるのかもしれない。

拒否の効果は, 依存の高低に関わらず認められたが, 依存高群においてより強かった。これは, 依存そのものが問題というより, 拒否という対人脅威が絡むと依存的な人の中でより強く不安が喚起されるという先行研究の主張と一致するものである (Zuroff & Mongrain, 1987; Besser & Priel, 2011)。

さらに今回の結果から, 母親へは安心感や甘えのようなものがある一方で, 親友に対しては関係を維持しようとする姿勢が見られること, 恋人はその中間に位置づけられることが示された。なお, Laursen & Collins (1994) は, 対人関係を closed relationship と open relationship の二つに分類しているが, 依存の高低に関わらず, 相手との関係性によって, 葛藤場面で抱く感情や, 処理方略は異なってくるのがわかった。

引用文献

- Besser, A., & Priel, B. (2011). Dependency, Self-Criticism and Negative Affective Responses Following Imaginary Rejection and Failure Threats: Meaning-Making Processes as Moderators or Mediators. *Psychiatry*, 74, 31-40.
- 大迫 弘江・高橋 超 (1994). 対人的葛藤事態における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす「甘え」の影響 実験社会心理学研究, 34 (1), 44-57.
- 竹澤 みどり・小玉 正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52, 310-319.